

盛岡辯の疑問法

橘 正 一

は し が き

疑問を表はすのに、「行く?」「来た?」といふ言ひ方は、私どもの子供の時分まではなかつた。初めて、こんな言葉を耳にした時には、「生意氣だな」と思つたものだ。所が、近頃の子供は、みなこれだ。これは、確かに東京辯の輸入である。「どこさ 行く」「いつ 来た」といふ言ひ方は昔からある。これは「どこ」「いつ」に疑問の意があるからいふ。しかし「行く」「来た」を、少し長めに、尻上りに、甘つたるい口調で言ふだけで、疑問の意味が出て來るとは考へられない。盛岡の一般の疑問法とも合はない。もし、私が小學校の先生だつたら、こんな東京辯のまねこそ矯正したかもしれない。

面白い事には、盛岡では、「どこさ 行く か」「いつ 来た か」などは、絶対に言はないのである。上に、疑問副詞を置いたら、下を「か」で結ぶことはできない。下を「か」で結んだら、上に疑問副詞を置くことはできない。要するに、疑問副詞と「か」とは兩立すべからざるものである。それを明かにするのが本稿の主たる目的である。

さて盛岡辯で疑問を表はす言ひ方は三種ある。第一種は疑問副詞を上置き、下を「べ」「あはん」「か、な」「す」「で、」で結ぶ言ひ方である。第二種は、下を「の」「下」「下す」「下え」で結ぶ言ひ方である。この場合は、上に疑問副詞をおく事もあれば、おかない事もある。第三種は、下を「ガ」「下ガ」「のガ」「カ」「下ッか」「の、

か」「すか」「ドすか」「のすか」で結ぶ言ひ方で、この場合には、決して、上に疑問副詞をおかない。

へ

何す へ……………未来

何した へ……………過去

何してら へ……………進行形

何したった へ……………大過去

なして さなか へ……………打消し

註、盛岡では「す」はサ行四段活用である。「した、た」は紫波郡飯岡村では「してあつた」と云ふ。

「してら」は「してゐるわ」のつづまつたものだから

うけれども、終止形と同じ取扱ひである。

なんほ はや^エか へ (いくら早いだらう)

どつ^ツつ^ツ ふてか へ (どっちが太いだらう)

何^ア おかし^カか へ (何が可笑しいだらう)

誰^{ナニ} 上手^{ウデ}だ へ

何時^{ナニトキ}だ へ

これは同輩に對する言ひ方である。目上に對しては、

「何 みさんす へ」「いつ おでんす へ」などと言

ふ。へは動詞の終止連體形につく。形容詞にはつかない。

い。この場合には、形容動詞の形にしてから、つく。しかし、實際はこの形容動詞がよほど崩れてゐる。

はやるべーはやかんべーはやかべーはや^エかべ

よかるべーよかんべーよかべーえかべ

動詞の打消しにつく時も、「爲な^ナべ」ではなく、「爲な^ナかべ」となる。これは形容詞の「みたくな^ナかべ」(醜いだらう)「うまくな^ナかべ」(まづいだらう)などの語法から感化されたのである。

この「べ」は譯すのに、ちよつと困る。「何をしましたか」ほど直截的な問ではない。むしろ、「何をしたらう」と自分自身に向つて問ふ心持である。殊に「おれ、なち、にせば、えかべ」(どうすれば、い^イだらう)などの様に、「べ」を低く發音する時は、一層さうである。それと云ふのも「べ」に本来、疑問の意味はないからである。

「べ」は、御承知の通り、「べき」の音便「べい」のつづ

まつたもので、本来、推量の助動詞である。疑問副詞を

省いて、「したべ」「來るべ」「行くべ」とすれば、「したら

う」「來るだらう」「行くでせう」となつて、推量の言ひ

方となる。推量する心は、やがて、疑ふ心であるから、

その心理が語法に反映して、次の様な場合には、推量兼

疑問となる。

うな した べ、 (お前がしたらう)
 また 来る べ (又来るでせう)
 お前はんも 行く べ (君も行くだらう)

あ は へん

どこさ 行かはん (どこへ行きますか)
 いつ 来らはん (いつ来ますか)
 なんほ 負けらはん (いくら負けますか)
 何 したはん (何をしましたか)
 なして さなはん (どうしてしないのですか)
 誰だはん (誰ですか)
 どつ、つ、きれいだはん(どつちが綺麗ですか)
 何、おかさはん (何が可笑しいですか)
 どれ、え、はん (どれが良いですか)
 誰、はやはん (誰が早いですか)
 どつ、つ、ふてはん (どちらが太いですか)
 何 尺あらはん (何尺ありますか)
 何 着らはん (何を着ますか)
 どこで 降りらはん (どこで下りますか)

「着らはん」は「着るあはん」のつづまつたもの、「え、はん」は「えあはん」のつづまつたもの、「誰だはん」は

「誰だあはん」のつづまつたものである。アハンは動詞、形容詞、助動詞、形容動詞等の終止連體形につく。アハンを使ふのは同輩の間だけである。従つて、おでる(おいでになる)ごろウじる(御覽になる)等の敬語にはアハンはつかない。

盛岡では、理由や原因を表はすのに、アハンテ又はアハントと云ふ。

寒み、はんで、羽織着ろ (寒いから羽織を着ろ)

今行かはんで、お待ち、 (今行くからお待ち)

おれ、さはんて、構な、で置くみさ、 (私がするから構はないで置きなさい)

このアハンテは前のアハンにテ又はトの附いたものらしい。して見れば、アハンには、本来、疑問の意味はないのだ。ために、疑問副詞を省いて、「来らはん」「おかさはん」としたのは、「来ますか」「可笑しいですか」といふ疑問の意味は全くなくなる。

も一つ注意すべき事は、東京でネと云ふ所に、盛岡ではナハンと云ふ。「寒みなはん」「寒いね」「綺麗たなはん」(綺麗ですね)「雨だなはん」(雨ですね)等。このナハンは感動詞のナに、前のアハンがくつついたものらしい。して見ると、アハンに疑問の意味のない事はいよ

いよ明かである。

かエな

いつ 来る かエな

どこさ 行く かエな

何 した かエな

何だ かエな

誰^ナ 上手だ かエな

どこ^コ いた^カか^ッ かエな (どこが痛い)

ど^ツつ^ツ えか^ッ かエな (どつちが良い)

なんほ ふてか^ッ かエな (いくら太い)

何^ナ おかすか^ッ かエな (何が可笑しい)

なして 行かな^カか^ッ かエな (なぜ行かない)

この「かエな」は目下に向つて使ふ。従つて、「おでる」「ごろうじる」などの敬語にはつかない。「かエな」は動詞の終止連体形につく。形容詞にはつかない。この場合には形容動詞にしてから附ける。打消しの「な^エ」にも直接はつかない。「な^カか^ッかエな」とする。これは形容詞の語法にかぶれたのである。

この「かエな」は、必ず、頭に疑問副詞を冠る。これを次の「け^ナ」と混同してはならない。

この前も 言^キた け^ナ

さ^キきたも (先刻も) 五^ツ錢 けた (くれた) かエな

去年も 遊びに 行^キた け^ナ

えか^ッけ^ナ

この「け^ナ」は回想の助動詞「け」に「むぞやな」(無慙やな、可愛さうに)などのヤナのくつついた「けやな」の訛だらう。「け^ナ」の代りに「け^ガ」としても、意味に變りはない。さて「け^ナ」「け^ガ」は、共に、自ら回想の感傷にひたるのではなくて、かへつて、相手をして、昔の事實を回想させる力を持つてゐる。だから「この前も言^キつたではないか」「良いではないか」「去年も遊^ビに行^キつたではないか」等と反語に譯せば、その心持は出て来る。これに反して、「いつ 来る かエな」等の「かエな」は「け^ガ」で置き換へることのできないものである。この「かエな」は「か^エ」に感動詞のナの添はつたものらしい。「雨^ア降^リつたか^エ、水^ミ殖^レえた」などの「か^エ」と「かエな」の「か^エ」とも何かの關係があるであらう。疑問副詞を省いて、單に「来る かエな」としたのでは意味をなさない。

す

いつ 來らす

何 した す

何 してらす

どつづ ふて す

何 おかす す

どこぞ 痛 ます

なして 行かな ます

誰 上手だ ます

なんぼだ ます

動詞、助動詞、形容詞、形容動詞等の終止連體形につ

く。又、次の様な言ひ方もある。

なして す

なぢに す

どこさ す

なに す

このスはヨで置き換へても、同じ事である。但し、盛岡では、ヨは目下に向つて云ふ。

お前はん す「誰、す」の答

ついでの時 す「いつす」の答

行くのす 「行くのすか」の答

このスもヨと意味同じ。但し、ヨは目下に向つて使ふ。要するに、スは、本来、感動詞である。疑問の意はない。

て ヤ

何 す で、

いつ 歸つた で、

どこさ おでんす で、

なして 行かな で、

どこぞ 痛 で、

何 おかす で、

誰だ で、

どこぞ 靜かだ で、

この「で、」は「だ、こ」(大根)の「だ、」とは發音が違ふ。テとヤとを同時に發音したものである。動詞、形容詞等の終止連體形につく。單に「痛、で、」と云へば「痛いよ」と云ふことであり、「行く、で、」と云へば、「行くよ」と云ふ事である。

以上を見渡すと、「べ」「あはん」「かな」「す」「で、」には、本来、疑問の意味はないので、上に疑問副詞を置いて始めて、疑問法となる事がわかる。以上を第一種とする。(未完)

盛岡辯の疑問法 (承前)

橘 正 一

の

いつ来るの

何したの

どこ、痛_エの

誰、上手だの

なして 行かな_エの

これは東京べんと同じである。親しい間がらに使ふ。年寄は使はない。動詞、形容詞などの終止連體形につく、又、疑問副詞を省いて、「来るの」「痛_エの」とすれば「來ますか」「痛いですか」といふ意味になる。

ト

いつ来るト

何 した ト

なして 行かな_エ ト

なんほだ ト

どこ、痛_エ ト

何、おかす ト

誰、上手だ ト

この「ト」は、實は、「と」の訛である。盛岡辯では、頭字以外の夕行音は、すべて、濁る癖である。但し、鼻にかからないから、本来の濁音とはすぐ區別がつく。ここには、區別して、片カナで書くことにした。

さて、この「ト」は、主として、親が子に向つて云ふ言葉である。動詞、形容詞などの終止連體形につく、疑問副詞を省いて、「痛_エト?」「行かな_エト?」とすれば、

相手が「痛い」「行かない」と云つたのに對して、念を入れて、問ひ返す言葉となる。「痛いて？」「行かないって？」と譯す。「痛い」と云ふか「行かない」と云ふか「の」云ふかを省いた形である。

ドす

いつ 来る ドす

何した ドす

どこ、痛。 ドす

何、おかす ドす

なんほだ ドす

誰、上手だ ドす

なして 行かな。 ドす

これは旧余臭い言葉である。文法上「ド」と同じ。疑問副詞を省いて、「痛。ドす？」「行かな。ドす？」とすれば問ひ、返す言葉となる。「痛いて？」「行かないって？」と譯す。

ドえ

いつ 来る ドえ

何した ドえ

どこ、痛。 ドえ

何、おかす ドえ

なんほだ ドえ

誰、上手だ ドえ

なして 行かな。 ドえ

年寄が使ふ。文法は「ド」「ドす」に同じ。「痛。ドえ？」「行かな。ドえ？」とすれば、問ひ返す言葉となる。「痛いて？」「行かないって？」と譯す。

以上を見渡すと、「の」「ド」「ドす」「ドえ」の四つは疑問副詞を伴ふ事もあり、伴はない事もあることがわかる。これを第二種の疑問法とする。「ド」「ドす」「ドえ」の「ド」が「と云ふ」の「と」であることは、その意味から見て、疑がない。「の」も「と」の訛ではあるまいか。

「の」を使ふのは若い人々や町の人々であり、「ド」を使ふのは年寄や田舎人である。これは「の」が、近世、江戸から輸入されたために、在來の「ド」は保守黨の間に隠れ家を見つけた事を語るものではあるまいか。

ガ

行く ガ

行った ガ

行かな^ニガ

行く^ニベガ (行かうか)

行^ッた^ニベガ (行^ッたらうか)

行かな^ニか^ニベガ (行かないだらうか)

行^ッた^ニた^ニガ

行^ッた^ニた^ニベガ (行^ッたたらうか)

痛^ニガ

遅^ニせガ

お^カすガ

静^ニか^ニだ^ニガ

先^ニ生^ニだ^ニガ

このガはカの説である。盛岡では、頭字以外のカ行音は濁る。但し、鼻にかからないから、本来の濁音とは容易に區別がつく。ここには、訛を片假名で表はすことにした。ガは動詞、形容詞等の終止連體形につく。「どこさ行く ガ」「いつ 来た ガ」等とは、決して、云はない。これが盛岡辯の特色である。ドコ、イツと言ひ出したなら、下は、必ず、「べ」「あはん」「かな」「で」「の」「ド」等で結ばなければならない。

ドガ

行く^ニドガ

行かな^ニドガ

行^ッた^ニドガ

痛^ニドガ

太^ニて^ニドガ

静^ニか^ニだ^ニドガ

先^ニ生^ニだ^ニドガ

これは「行く」と云ふのか」「痛い」と云ふのか」といふ心である。動詞や形容詞の終止連體形につく。「どこさ行く ドガ」「いつ 来た ドガ」等とは言はない。

のガ

行く^ニのガ

痛^ニのガ

これは東京べんの「行くのか」「痛いのか」と、意味全く同じ。但し、「いつ行くのか」「どこさ痛のか」等とは決して言はない。

すか

行く^ニすか (行きますか)

行かな^ニすか (行きませんか)

行ッた すか (行きましたか)

行く べ すか (行きませうか)

痛^ニ すか (痛いですが)

おかす すか (可笑しいですか)

上手だ すか (上手ですか)

いたがんです すか (痛うございませうか)

おでんす すか (おいでになりますか)

おでんせ すか (おいでになりませんか)

この「すか」の「か」は、不思議に、消んで言ふ。動詞や形容詞の終止連體形につく。やはり、「いつ 行く すか」などとは言はない。

ド すか

行く ドすか (行くのですか)

痛^ニ ドすか (痛いのですか)

「ドすか」の「か」も消む。意味は「行くと云ふか」「痛いと云ふか」に似てゐる。動詞や形容詞の終止連體形につく。敬語は

おでんす ドすか

いたがんです ドすか

となる。やはり「いつ 行く ドすか」「ど^ニ 痛^ニ ド

すか」などとは言はない。

の すか

行く のすか (行くのですか)

痛^ニ のすか (痛いのですか)

「のすか」の「か」も消む。動詞や形容詞の終止連體形につく。やはり「いつ 行く のすか」「ど^ニ 痛^ニ のすか」とは云はない。敬語は、

おでんす のすか

いたがんです のすか

ツ か

行くツか

行かなツか

行ッたツか

痛^ニツか

おかすツか

静かだツか

この促聲は將に消えんとしてゐる。しかし、よく聞けばかすかながらも、ある事がわかる。さて、この「ツか」は前の「すか」の訛ではないかと思ふ。目上の人が、目

下に向つて使ふ言葉であるが、多少、敬意を含んでゐるか
ら、叔父、叔母が甥、姪に對する時など適當してゐる。
動詞や形容詞の終止連體形につく。やはり「いつ 行く、
か」などとは言はない。

ド ツ か

行く ドツか

痛^エ ドツか

これも「ドすか」の訛だらうと思ふ。「ドガ」と意味同じ
くして、それよりも叮嚀である。動詞や形容詞の終止連
體形につく。やはり、「いつ 行く ドツか」などとは言
はない。

の ッ か

行く のッか

痛^エ のッか

これは、東京の「行くのか」「痛いのか」と意味は同じだ
が、それよりも叮嚀である。叔父、叔母が甥姪に對して
使ふ。動詞や形容詞の終止連體形につく。やはり「いつ
行くのか」などとは言はない。

以上、第三種をまとめ、表にして示すと、次の様に
なる。(但し訛音の記號を除く)

	か	下	中	上
のですか(下)	とか	とッか	とすか	
のですか(上)	のか	のッか	のすか	

以上を見渡すと、すべて「か」を含んでゐる。この「か」
に疑問の意味はあるのである。そして、この「か」が疑問
副詞と兩立しないものである。但し、次の場合は違ふ。

何か 食た^エガ

誰か 來た すか

どこか 悪り ガ

どこさか 遊びに 行かな^エ すか

いつか おらほさ 來な^ニ すか

「誰か 來た すか」(誰か來ましたか)は「誰^ニ來たはん」
(誰が來ましたか)とは違ふ。日本語では紛らほしいけれ
ども、英語に譯して見れば、この區別はすぐわかる。後
者は來た人の名を問ふので「誰^ニ」に重點があり、前者は
來客の有無を問ふので「來たすか」に重點がある。「誰か
來た すか」の「誰か」は疑問でなくて、不定稱である
だから「人」といふ字で置きかへて「人^ニ 來た すか」
(人が來ましたか)としても、同じ事である。その外「何
か食ふ」は「物食ふ」であり、「いつか行く」は「他日行
く」である。だから、疑問副詞と「か」とは兩立しない
といふ法則は、やはり、眞理である。(完)